

心理療法の一助としてみる『遠野物語』の イメージについての一考察

甲南大学学生相談室 友久茂子

I. はじめに

IT 機器が急激に発達したここ十数年、若者たちの心は身体と切り離され、対人関係のあり方は急激に変化した。学生相談室に持ち込まれる相談も、知的能力に比してコミュニケーション力が不足したまま大学に入学し、主体性を求められる大学生活に適応できなくなるケースが多くなったと感じている。こういった若者の問題の根底には、急激なIT化によって生み出された体験不足が横たわっている。ほんの数十年前まで、子どもの遊びとして当たり前存在していた土や動植物とのふれあい、身体をぶつけ合う遊びを通して五感を磨くこと、あるいは家族や友人との交流を通して、いつの間にかコミュニケーション能力が育まれていた。しかし、社会の変化は急激に人々の交流を阻み、そのために若者たちは生きる力を枯渇させたまま大学に入学してくることになる。それについて櫻井(2008)は、最近の学生は対人関係に過敏に傷つきやすくなり、不安と回避傾向が強まっていることを実証的に示し、その要因として「発達期において同性・同輩の関係の中で適応様式を身につける機会、つまり親しく交わる機会が顕著に少なくなっている」と述べている。それが典型的な形で現れてきたのが、発達障害やアスペルガー症候群といわれる一群の人たちといえる。彼らは生得的な障害を抱えるゆえに、今では特別な存在と扱われることが多くなったが、彼らの特性や症状は、以前から人格特性として有していた人が相当数存在していたと思われる。しかし、今日ほどその特性は問題視されることはなく、むしろある種の能力として評価されることすらあった。つまり、ほんの少し前まで彼らは動植物などの自然や

人々との関わりの中で、不器用ながらも豊かな体験を経て、それなりの社会適応を果たし、社会も彼らにその場を提供していたと考えられる。言い換えれば、若者から豊かな体験の機会を奪うことによって、新しい「障害」や、当たり前前に生きることができず苦悩する若者を生み出したということができる。彼らに向き合う時、学生相談室のカウンセラーとして自分に何が出来るのであろうか。筆者は学生相談室のスタッフとして、この素朴な疑問の答えを見出すため頭を抱えて悩み、最近では多種多様な書物をひも解くことが多くなった。

学生相談は大学内の学生支援機関として、心の問題を抱えた学生にカウンセリングや心理療法という形で対応すると同時に、心の発達援助をする教育の役割も担っている。そのためグループワークやウィークリーグループとして、さまざまなプログラムをスタッフ一丸となって考え、全学の学生に提供してきた。あるいは、全学共通科目に少人数のワークショップ型授業を企画し、陶芸や茶湯の体験コースの導入も試みた。これらはもろもろの問題を含みながらも一定の成果を上げ、今後も継続することが求められるであろう。しかし、若者たちが体験不足だからといって、大学教育において実際に体験できることには限界がある。むしろ呼びかけても響きにくい若者に向き合う場合、無限の可能性を提供できるのはイメージとしての体験ではないかと考え、筆者(2006)は、来談者とカウンセラーの間に交わされるイメージの体験が重要であることを、深い病理を抱えた学生との面接過程を通して主張した。イメージの体験について河合(1991)は「イメージおよびイメージ言語の理解には、『私』の体験が必要である」とし

た上で、「体験の共有をしつつ、研究者はそれを対象化して言語化するという仕事をしなくてはならないが、そのバランスは極めて難しい。(中略)このような微妙なバランスの上に立って、イメージの研究がなされることになる。そして、イメージの心理学を理解するためには、その人も自分自身のある程度の体験を必要とする」と述べている。つまり、来談者がイメージの体験をすることを可能にするのは、カウンセラー自身が豊かな体験をしていること、あるいはクライアントとイメージを共有しうる体験を持ち、それを言語化できることが求められる。河合が言うように、深いレベルでのイメージを言葉で表現することは難しいが、それは日本人の基層に根付くアニミズム体験と同質のものではないかと筆者は考えている。アニミズムについて岩田(1993)は「ハッと驚いて、立ちどまる。これはただ事じゃない。不思議だ。ここに人間の文化を超えたものが露出している。カミだろうか。奇妙な経験だ。ひょっとすると、自分が自分に会ったのだろうか。なんとなく心が落ち着いてくる。そういう経験・事実と、その解釈の伝統に名づけられた名まえである」と説明している。このような体験こそ、心理療法の仕事をする上で、言い換えれば「イメージの共有」をする上で求められるのではないだろうか。

そこで、ここでは柳田国男の『遠野物語』(1988)を取り上げ、心理臨床の視点からそのイメージについて論じていきたい。遠野物語を取り上げたことに関しては、遠野物語には自然と一体化したアニミズムの世界があり、近代化の流れの中で切り落としてしまった豊かな境界イメージが息づいており、これを読むこと自体がイメージの体験であり、体験不足を根底に持った若者への心理療法をする上で意味があると感じられるためである。また、河合(2008)は遠野物語の意識のあり方を分析する中で、「意識も無意識も主体としない心理学を教えてくれるのが遠野物語ではないか」と問いかけており、今日の問題と向き合うカ

ウンセラーとして、遠野物語について論じることによって、生き方の知恵を学び得るのではないかと考えたためである。

Ⅱ. 柳田国男と『遠野物語』について

明治、大正、昭和を通じた柳田国男の88年間の生涯と、その仕事に対する評伝については、夥しい数の書物が編まれている。そのことは柳田が20世紀を代表する文化人であることを物語るが、彼の仕事はその出自や経歴と深く関わったことと思われる。

『柳田国男伝』(1988)や『故郷七十年』(1974)によれば、柳田は1875年(明治8年)兵庫県神東郡辻川に、父、松岡操と母たけの六男として誕生する。「辻川」は姫路市から15キロほど北に入った農村で、但馬国生野と播磨の港とを結ぶ生野街道と、加西郡北条に繋がる東西の道が交わる地である。「辻川」の「辻」とは人が多く集まる所をさし、そこでは「辻説法」や「辻談義」が行われ、交易や芸能が営まれ境界性を象徴する地である。父親は漢学や医学に通じる在村の知識人であったが世間知らずで、家庭はしっかり者の母親が切り盛りしていた。国男五歳のとき、若くして小学校の校長になっていた長兄が結婚するが、小さな家に二世帯が同居したため、嫁姑の折り合いが悪く、兄嫁は一年後に実家に逃げ帰ったという。その後近村からもらった後添えも、程なく逃げ帰り、彼女は実家からも追い出されて、入水自殺を図ったことから、長兄も深く心を傷めていたとされる。この兄夫婦をめぐる一連の出来事は幼い国男の心にも深く刻み込まれたと推測することができる。

また10歳になった国男は兵庫県加西郡北条で厳しい飢饉を体験しているが、そのことが、後の「常民」学としての民俗学に自身を引き寄せたと回想している。13歳になった時、校長職を辞し苦学の末医者となり茨城県北相馬郡布川で開業していた長兄にひきとられた国男少年は、二年間奔放な少年時代を過ごす。しかしそこは長年激しい飢

鐘に見舞われた地で、公然と間引きが行われ、地藏堂には悲惨な間引きの様子を描いた絵馬があり、それを見た国男少年は強い衝撃を受けている。

1890年になって国男は布川から上京し、後に歌人としても知られ、開業医となった次兄井上通泰のもとに身を寄せ、森鷗外、田山花袋、島崎藤村、国木田独歩とも親交を深め、文学青年として『文学界』に短歌を発表することもしばしばあった。一方で、日本を代表するエリート校である第一高等学校から、東京帝国大学法科へと進学し、当時としては新しい農政学を学ぶことになる。しかし、高校在学中には両親の急逝という不幸に見舞われ、感傷的になりがちな青年期に深い喪失体験をしたことが窺われる。大学卒業後は農商務省に勤務し、農政エリート、農政学者として活躍するが、両親の死以来、当時一般に期待されていた「立身出世をする」という思いは徐々に失せていったようである。そのようなことも影響して、当時、明治国家が富国強兵を唱え、工業化を推進する中で、柳田は農業を重要産業と捉え、小百姓、労働者のための政策の必要性を主張し、独自の農政理論を展開している。この柳田の主張が実現するのは第二次大戦後の農地改革によってであり、これが先駆的であったことが窺われるが、当時の正統的農政学とは対立し、徐々に農政学から離れ、民俗学へと移っていった。その間に、国男26歳の時、大審院判事であった超エリートの柳田家の養子となり、松岡国男から柳田国男となり、29歳になって柳田家の娘孝と結婚する。養子となった事情は柳田自身もほとんど触れておらず、柳田の大きな謎の一つといわれている。

そのころ、農務局から法制局参事官、宮内書記官を歴任し、三ヶ月にわたって九州を旅し、椎葉村に入り、狩りの故実の話を聞く。翌年1909年、柳田34歳の時、山人論三部作といわれる『後狩詞記』『石神問答』『遠野物語』を刊行し、遠野にも実際出向いている。しかし、このころ帝国日本は植民地政策を推し進めており、北海道、沖縄、台

湾、樺太と植民地化し、柳田はその政策上の必要性から全国各地への旅の生活をおくっていたと考えられる。さらに柳田は朝鮮併合にも直接関わり叙勲もされている。このように1919年貴族院書記官長を辞任するまで二十年近い間、高級官吏として日本の植民地政策に貢献しながら、一方で代表作とされる三冊の山人論を著している。これについてはさまざまな議論があるが、筆者は現代人が抱える問題と同質の心の在りようを思い描いている。つまり、植民地政策による無限の拡大を目指す帝国日本のエリートである柳田の内面で相当大きな乖離が起り、その表現方法として原始へ回帰し、山人論を書かざるを得なかったのではないかと思えてならない。つまり、遠野物語は遠野の人である佐々木喜善によって語られた、遠野の民間伝承とされているが、実際には柳田自身の体験と深く関わり、柳田の物語でもあると考えることも不可能ではない。

このように『遠野物語』は佐々木が語ったものを柳田が筆記したものとされているが、その誕生の経緯について岩本（1983）は、話を語った佐々木と、それを筆記した柳田、そこに立ち会ったとされる水野葉舟の文を比較検討することで、日本文化史上における位置を明確化しようと試みている。しかし、近年柳田学の新しい解釈に取り組んでいる赤坂（1994）はそれについて「ある意味で、わたしたちの生の現場がひとしなみに『外国』と化して行ったときに、はじめて『遠野物語』は発見されたのだともいえる」とし、今日的意味を模索している。いずれにしても日本の近代化史上特異な存在である柳田国男によって生み出された『遠野物語』は、今日まで広く人々の心を捉え、活発な議論が交わされ、夥しい数の出版物が刊行されてきたが、筆者には『遠野物語』の真価にはまだ手を付けられないまま見過ごされているように思われてならない。その一つは『遠野物語』を書いた柳田の人格的側面、つまり、柳田の人生や作品の外側の姿ではなく、柳田自身の内面につい

ての分析である。具体的には、柳田は近代化の流れの中で、西洋の思想と文化を新鮮な感覚で吸収しているにもかかわらず、キリスト教的思想に一定の距離を置いている。むしろ、民衆の底辺ではキリスト教以前の神々への信仰があることを、ハイネ（1853）の『流刑の神々』から学び、それが柳田学を確立する契機なると中村（1974）が指摘しているが、そのことについて柳田自身の心のありように対しては深く議論されていない。もう一つは、『遠野物語』で語られたことが、民間伝承として真実かどうかとか、誰の書いた『遠野物語』が生きられた伝承世界を表現しているかという問題ではなく、柳田の手によって簡潔な文語体で書かれた『遠野物語』そのものを人々の内的現実として捉え考察することである。これが遠野の方言ではなく文語体で書かれたことは、人々の伝承としてではなく、物語に普遍性を持たせ、人々の内的現実として捉える柳田の無意識的意図を感じることができる。そこには日本人の多くが無意識の奥深くに追いやった生と死にまつわるイメージであふれている。そこで、ここでは後者の課題、つまり、遠野で生まれ、柳田によって記述された歴史や民族に関わる物語を取り上げ、イメージを広げ、人間の生きる智恵、さらに言えば、生きとし生けるものにとって、少しずつ確かに近づきつつある死について学び、それを心理臨床に役立ててみたい。

物語については、河合（2003）は「そもそも心理療法というのは、来談された人が自分にふさわしい物語をつくりあげていくのを援助する仕事」であると述べ、「何かを関係づける意図から物語は生まれてくる」としているが、『遠野物語』は、その一話一話が、人を神々や自然と関わらせ、大地に根付かせる働きをし、筆者には心理療法と同様のプロセスを描いているように思われてならない。

全体の構成からみると、『遠野物語』は百十九の短い話が特別な意図をもたないまま、順次語られていくように感じられるが、実は綿密に計算さ

れ、深く心に収まるように構築された物語といえる。序文の次は「目次」ではなく「題目」として、番号をつけることなく話のテーマを三十数個挙げている。一番目は「地勢」、二番目は「神の始」で、最終は「歌謡」となり、話の流れと一致するところもあるが、テーマは行きつ戻りつしながら描かれ、第一話から百十九話までの番号と内容が一致するわけではない。このこと自体、心理療法の経過を語っているようでもある。大まかに見ていくと、初めに遠野の地形とその成り立ち、次に遠野の三山に住する女神の謂れ、山女、山男が続く、花や鳥、猿や狐といった動植物、河童の話や昔話も語られ、最後百十九話は、獅子舞の時に古くから歌われていた、めでたい内容の歌謡で「けんたい殿は二階座敷に昼寝すて、銭を枕に金の手遊び」というのも見られる。しかし、その間の大部分は、神々の話や家の盛衰、山の霊異や姥捨てにまつわるもの、魂の行方など、死にまつわる内容で、まるで能の演目を見ているようにも思われ、「物語」として不思議な流れを感じることができる。

Ⅲ. 『遠野物語』のイメージ

1. プロローグ

『遠野物語』は「地勢」から始まるが、それによると遠野は「山奥にしては繁華の町」で南北の川の落合いにあり、以前は「七つの溪谷各々七十里の奥より売買の貨物を集め、其市の日馬千匹、人一千人の賑はしきなりき」と描かれ、柳田が誕生した「辻川」の地を連想させる。しかし、言い伝えによると遠野の地すべて大昔は一面の湖水だったことが語られ、「遠野郷のトーはもとアイヌ語の湖という語より出でたるなるべし」と註釈をつけ、何とも幻想的な地であることを匂わせている。第二話は、遠野は四方を山々に囲まれているが、その中でも最も秀でた早池峰山と、それより低い六角牛山と石神山があり、その山にまつわる話である。大昔に女神が三人の娘を連れてその地を訪

れ、「今夜はよき夢を見たらん娘によき山を与うべし」と言った。そこで三人は眠り姉の胸の上に霊華が舞い降りるのだが、それを姉たちに気付かれないように末娘が自分の胸の上に置き、それによって、末娘は早池峰山を得、姉たちは夫々六角牛山と石神山を得、今日までそこに住んでいる。そのため姉たちの嫉妬を恐れて、今も遠野の女性たちはそこに近づかないという。山々、夢、女神、嫉妬などと、夢幻と情念という此の世ともあの世とも区別のつかぬイメージから遠野物語は幕を開ける。

2. 男女の境界と異界との交流

男女の境界は山男山女の話として第三話から九十二話までの間に十二話語られているが、まず第三話をとりあげてみる。

「山々の奥には山人住めり。栃内村和野の佐々木嘉兵衛と云う人は今も七十余似て生存せり。此翁若かりし頃獵をして山奥に入りしに、遙かなる岩の上に美しき女一人ありて、長き黒髪を梳りて居たり。顔の色極めて白し。不敵の男なれば、直に銃を差し向けて打ち放せしに弾に应じて倒れたり。そこに駆け付けて見れば、身のたけ高き女にて、解きたる黒髪は又そのたけよりも長かりき。後の験にせばやと思ひて、其髪をいささか切り取り、これを箱ねて懐に入れ、やがて家路に向いしに、道の程にて耐え難く睡眠を催しければ、暫く物陰に立寄りてまどろみたり。その間夢と現との境のやうなる時に、是もたけの高き男一人近よりて懷中に手を差し入れ、かの箱ねたる黒髪を取り返し立去ると見ればたちまち睡は覚めたり。山男なるべしといえり。」

彼らは山深くに出没し、黒髪が長く美しい女と思っていると、背の高い男として現れ男女の境や区別は無く、弾で撃たれ死ぬことで男女が出会い、睡気を催し「夢と現の境のやうなる時」、つまり、意識と無意識の間にことは起こっている。

また第七話では、神隠しの話で、女性が男性にさらわれ、恐ろしいが逃げ出すこともできず、子を生むが子はその男に殺されるか食われてしまう。

異界の男性との交わりは、「食われる」「殺される」というテーマで登場する。残忍な話だがさりと語り、運命を受け入れる女性の姿と死を身近なものとして感じさせる。

山女はしばしば「女の呼び声」や「叫び声」として登場する。九話では笛名人の老人が月夜の晩、峠を越え深い谷に入ろうとすると谷底から呼び止められる声を聞いて逃げ帰る。十話は深夜に奥山へ入った男が女性の叫び声を聞いた夜、自分の妹が息子に殺される。二十九話から三十五話までは人々がめったに入らない深い山に狩りに行った猟師や、茸採りに入った村人が出会った山男や山女の話で「坊主」「異人」と称され、ここでも女は「叫び声」として描かれている。ここに登場する深い山や異人、叫び声は異界を連想させ、音や声が異界と交流し死を招き入れている。

第二十七話は早池峰山から宮古の海に流れる閉伊川の流域に伝わる伝説で、若き女から一通の手紙を託され、その使いを果たすことで、米一粒を入れて回すと黄金が出る石臼をもらい、その家は少し豊かになるが、妻が欲深くたくさんの米粒を入れると、石臼は自ら盛んに回り、遂に見えなくなってしまう。自然の限界を超えることで物事が逆転する話で、日本の昔話にはしばしばみられるテーマであるが、これらは無欲さや正直さに自然界や異界は重い価値を置いていたことを物語る。同様の話は六十三話で次のようなものである。

「小国の三浦某と云うは村一の金持なり。今より二三代前の主人、まだ家は貧しくて、妻は少しく魯鈍なりき。この妻ある門の前を流るる小き川に沿いて露を採りに入りしに、よき物少なければ次第に谷奥深く登りたり。さてふと見れば立派なる黒き門の家あり。訝しけれど門の中に入りて見るに、大なる庭にて紅白の花一面に咲き鶏多く遊べり。その庭を裏の方へ廻れば牛小屋ありて牛多くおり、馬舎ありて馬多くおれども、いっこうに人は居らず。ついに玄関より上りたるに、その次の間には朱と黒との膳腕をあまた取出したり。奥の座敷には火鉢ありて鉄瓶の湯のたぎれるを見たり。されどもついに人影は無ければ、もしや山男の

家ではないかと急に恐ろしくなり、駆け出して家に帰りたり。(後略)

その後川で仕事をしていると、川上から先ほど見た赤い椀が流れてくる。それを穀物を測る器として用いると、この家は幸運が続き、村一の金持ちになる。ここでも無欲な妻の存在が家を救っている。これに出てくる奥深いところに現れる家を「マヨヒガ」というが、「マヨヒガ」は情景は豊かで、その意味も音の響きも異界のイメージがわく。

第六十五話から六十八話までは、昔栄えた安倍氏にまつわる伝説である。特に六十五話は七十一話と共に、柳田が「姥神」と名づけた話で、早池峰山の奥には安倍ヶ城という岩があり、そこには安倍貞任の母親が住んでおり、その老女は念仏者だが、邪宗らしい信仰を持ち、阿弥陀仏の齋日には夜中に祈祷をし、それが権威を持っていたという。これは異界と交流する老女が信頼と権威を持ち得たことを窺わせる。

第七十五話から八十三話までは「長者」とか「物持ち」と言われた家の様子や家の中で起こる不思議な出来事が語られ、一般的な家の造りと大洞万之丞の家の図面が記されている。話の内容は、工場の人夫が夕方になると女に連れ去られる「神がくし」と思われるものや、軒下に死者と思われる人が横になっているが朝には消えているといった「まぼろし」に出合った話などである。赤坂(1994)はこれらに登場する異界や他界への通路として、家の「軒下」や「門口」、庭の「垣根」や「石」を挙げているが、それらは閉塞感のあるものではなく、ほとんど形が無かったり、隙間のある空間である。このことは生死を含めた物事の境界が当時は極めて風通しの良い空間としてイメージされていたことがわかる。

3. 動植物と人々の関わり

深い山の囲まれた場であれば当然のことであるが動植物との交流も盛んに行われている。第十五話から十八話までは家の神にまつわる話である。

その中でオクナイサマは大同と言われる旧家に祭られ、それを祭ると幸多いといわれている。神体は桑の木を削って顔を描き、四角い布の真中に穴をあけて衣装にしている。つまりちょっと手を加えられることによって木は神になりうる。正月十五日には村人が集まりこれをお祭りする。オクナイは「屋内」や「奥内」を連想させ、家の内でもあり心の内でもあると考えることができる。オシラサマもオクナイサマと同様の神だが、六十九話に老女の語った異類婚の話として登場する。その一部を取り上げてみる。

「昔ある処に貧しき百姓あり。妻は無くて美しき娘あり。また一匹の馬を養う。娘この馬を愛して夜になれば厩舎うまやに行きて寝ね、ついに馬と夫婦になれり。ある夜父はこの事を知りて、その次の日に娘には知らせず、馬を連れ出して桑の木につり下げて殺したり。その夜娘は馬のおらぬより父に尋ねてこの事を知り、驚き悲しみて桑の木の下に行き、死したる馬の首くびに縋りて泣きいたりしを父はこれを悪わるみて斧おのをもって後より馬の首を切り落せしに、たちまち娘はその首に乗りたるまま天あまに昇り去れり。オシラサマというはこの時よりなりたる神なり。」

馬と娘との結婚と、それを嫉妬する父親像は性的でもあり暴力的でもある。赤坂(1994)は「生産力の象徴である馬=異類と処女が交わることで、共同体に超自然的な外部の力を導き入れる呪術的な語りの装置」としているが、馬と人間の関係が性的関係で表現されている。性関係は母子関係と同様極めて親密な関係である。いわば人と馬は一体化し、馬が共同体の重要な構成員であったことがわかる。ただし、六十九話はオシラサマの由来譚として語られているが、赤坂(1994)によると、盲目の巫女であるイタコが、死者の口寄せをする際に唱えた祭文で、祭りの庭でのみ語ることを許された秘伝の物語であるという。そこから連想されるのは死者と動物との深いかかわりでもある。

また、第十九話から二十一話までは茸を食べた事や蛇を殺したことで家が傾き、狐と親しくなり家を富ます術を得たなど、いずれも動植物が家の

盛衰に深く関わっていたことを窺い知ることができる。さらに第三十六話から四十九話までは狼、熊、猿、鹿など動物が次々と登場する。特に狼については馬を襲う恐ろしい、しかし賢明な存在として、数個のエピソードを記している。中でも、ある年の秋に萱を刈るために、六角牛山に出かけた飯豊村の村人が、岩穴で仔狼を見つけ、そのうち二匹を殺し一匹を持ち帰ると、その日から狼は飯豊村の馬だけを襲い続けたという、恐ろしい存在でもあるが、人間と同様の憎しみや怒りをもつ存在としても描かれ、「御犬」と尊敬をこめて呼ばれている。

第五十一話は長者の娘と仲良くなった別の長者の息子とが二人で山に入っていくが、息子は突然姿を消す、するとオット鳥となって「オットーン、オットーン」と寂しくあわれに鳴きながら飛んでいく、それが「夫」となったとされる。次も鳥の話で、ある長者の奉公人が山へ馬を放しに行き、帰ろうとすると一匹足りないため、夜通し探し回るが遂に「アホー、アホー」と鳴く馬追鳥になってしまう。この鳥は深山では常に鳴くが、里に来て鳴く年は飢饉の前兆とされる。この二話はいずれも深山に立ち入ることで、人間が鳥に同化してしまう。音の響きはユーモラスだが話の内容は深刻である。

ユーモラスな話としては九十四話で餅を懐に入れて山のふもとを歩いていた男が友人と出会い、面白がって相撲を三番取るが、友人と別れてみると、懐の餅がなくなっている、ようやく狐に騙されたのに気がつくが、恥じて人に話すことができずにいた。しかし、正月の宴席で狐の話題が出た時に話して大いに笑ったというもので、死のテーマが続く中で人と動物の交流をユーモラスに描いている。

4. 生死の境界

この物語の底流に常に死の影が見え隠れするのだが、真正面から生と死を描いたのは五十五話か

ら五十九話までの河童にまつわるものである。その描かれ方のひとつは馬に悪戯をするため、捕らえられるが村人の話し合いで命を助けられるもので、今ひとつは醜い姿で、捨てられたり、殺されたりするもので、五十五話をとりあげてみる。

「松崎村の川端の家にて、二代まで続けて川童の子を孕みたる者あり。生れし子は斬り刻みて一升樽に入れ、土中に埋めたり。その形極めて醜怪なるものなりき。(中略) その産はきわめて難産なりしが、ある者の言うには、馬槽に水をたたえその中にて産まば安く産まるべしとのことにて、これを試みれば果たしてその通りなりき。その子は手に水掻きあり。この娘の母もまたかつて川童の子を産みしことありという。二代や三代の因縁にはあらずと言う者もあり。この家も如法の豪家にて〇〇〇〇と云う土族なり」

この話についてはさまざまな解釈が加えられてきたが、赤坂(1994)は「イエの盛衰を賭けて、あるいは“家の貴さ・血の清さ”を証し守るために、ということだ。娘が間男の子を産んだという不名誉な事実は隠され、異界の存在である河童(零落した水神の貌をもつ)との避けがたい超自然的交渉の結果、といった位相へずらされ、幻想的な事実譚が誕生した」としている。筆者はそういった側面を否定するものではないが、「河童」をイメージしてみると、胎児の姿が鮮明に浮かび上がる。家族計画、産児制限などが十分に生かされていない時代に、間男の存在を生み出すまでもなく、望まれないこどもの誕生は相当数あったのではないかと考えられ、切り刻んで土中に埋められるのは“墮ろされた胎児」と想像できる。さらに動物の発生から考えても、水かきをもった不思議な動物は、産まれることを拒まれた発生間もない人間の姿といえる。五十六話では生まれた河童の子は「道ちがへ」に捨てるために持っていったことが語られているが、「道ちがへ」は再生のイニシエーションの場でもある。またこのことは柳田が少年時代、飢饉の「間引き絵間」を見て衝撃を受けたことと無関係とは思われない。このように河童は生命を拒否された幼い死者の魂でもあり、

葬られた命の再生への願いでもあったと考えられる。

それとは逆にこの世で一応の仕事を終え大病を患い、すでに病床にあるはずの人が、人々に会いに来る話が第八十六話から八十八話まで続く。彼らはその後まもなく息を引き取ったとされ、死の直前に魂は肉体から離れ、最期の望みを叶えようとしている。九十五話から百一話までも死にまつわる話で、いくつかは臨死体験を思わせる。例えば九十五話では、美しい岩を見つけて持ち帰りたいたいと思ひ、持ち上げてみるがあまりの重さに、道端でその岩にもたれている次のような情景である。

「石と共にずっと空中に昇り行く心地したり。雲より上になりたるように思ひしが実に明るく清き所にて、あたりにいろいろの花咲き、しかもいずことも無く大勢の人声聞えたり。されど石はなおますます昇り行き、ついには昇り切りたるか、何事も覚えぬようになりたり。」

第百二話から百五話までは一月十五日の小正月の話で、その夜の催しや、不思議な出来事について、雪女や山の神が登場する。百六話では、海岸沿いの山田というところに毎年蜃気楼が出る、そこは路上に車馬が激しく行き交い、まるで外国の景色のように見えると異国を見据えて語られている。あるいは百七話、百八話では見慣れぬ大男や異人は山の神であり、山の神が乗り移ることで、占いをする人が多い。その占いは相手の顔も見ず、思い浮かぶことを語っているだけだが、たいいてはその通りになる。このように異界から送られる雪女や山の神、蜃気楼や異人たちは時に人々に霊力を与え、人々はそれに信頼を寄せる。

いよいよ物語も終わりに近づき、死への旅立ちの話が始まり、百十一話から百十四話までは、ダンノハナと蓮台野についてだが百十一話には次のように語られている。

「山口、飯豊、附馬牛の字荒川東福寺及火渡り、青笹の字中沢並に土淵村の字土淵に、ともにダンノハナという地名あり。その近傍にこれと相對して必ず蓮台

野という地あり。昔は六十を超えたる老人はすべてこの蓮台野へ追いやるの習いありき。老人はいたずらに死んでしまうこともならぬゆえに、日中は里へ下り農作して口を糊したり。そのために今も山口土淵辺にては朝に野らに出づるをハカダチといい、夕方野らより帰ることをハカアガリというといえり。」

そして注釈が付けられ、ダンノハナは「壇の塙」であり丘の上で塚を築き、境の神を祭るためのものであったという。次の百十二話にはダンノハナが昔囚人を斬るための地であったが、そこに塚を築き共同墓地となっていることや、ダンノハナと蓮台野の地理的な説明が加えられている。蓮台野に追いやられた老人が命の尽きるまでその地で働き、静かに死を待つ姿が窺われる。現代でいえば、ホスピスのようでもあるが、ここでは老人はどこまでも受け身ではなく主体的に最期まで働きつくり、命の輝きを感じることができる。だからこそ“蓮台野”に住している。つまり、蓮台は蓮華座であり、菩薩が据わる座を意味し、彼岸へ旅立つ準備をする地であった。そのためか悲壮感が漂わず、生死の境の地として、極めて重要な役割を演じている。

5. エピローグ

物語のおわりを飾る百十八話は「昔々」と題された次のような話である。

「紅血欠皿の話も遠野郷には行わる。ただ欠皿の方はその名をヌカボと云ふ。ヌカボは空穂のことなり。継母に悪まれたれど神の恵みありて、ついに長者の妻となるという話なり。エピソードには色々の美しき絵様あり。折あらば詳しく書き記すべし。」

最終の百十九話も獅子舞の時に用いられた歌謡で、内容もめでたくハッピーエンドで終わらせたと思われる。それによって、異界をさまよっていた読者は目を覚まし、現実界に生きることを容易にしているのではないだろうか。

IV. おわりに——境界イメージについて

『遠野物語』は百十九の口承物語が次々と語られ、物語の前後関係も必ずしも明白ではなく、一つのストーリーとして、特定の主人公が登場したり、物語の大きな展開や結末があるわけではない。そのイメージに寄り添ってみるとある特徴が見えてくる。まず第一はこの物語の主人公は「人々」であること。「何某」であったり「男」や「女」、「娘」や「老女」とときには職業や社会的価値が付されて「猟師」や「長者」「物持ち」、場合によっては個人名が記されていることもあるが、特別な権力をもった者は一人も登場しない。心理療法においても、来談者とセラピストの間には、時間や料金といった外的枠が設定されるが、互いの社会的地位や権力関係は全く成立しない。セラピストが向き合うのは、いわば「何某」というべき人で、その人の過去も未来も、社会的な一切の役割も特別な意味を持たない。そこには向き合った両者の身体感覚を通じた体験と、二人の関係の中に生まれてくるイメージだけで、互いの中に生きる内界の人格が出会っているとさえ考えられる。これについては鶴見和子（1977）が柳田の仕事の評価して、私たち自身の内に原始、未開人を発掘したことをあげているが、これはユング（1954）が元理論の中でペルソナに対して、内的人格（Seele）を認め、夢や精神病患者の妄想の中に、古代の神話や宗教と共通のイメージを見出したことに通じる。

第二に、ことの展開はだいたい夕方から深夜におこり、身近な出来事でありながら、非日常としてイメージされる。また、ことの起こる場所は、遠野という地勢のイメージから常に背景に深い山をいただきつつ、「山」「峠」「池の淵」「河原」、「門」「庭」など境界がイメージされる場で起こっている。遠野が「山奥にしては繁華な町」とされながらも、決して市場や家の厨房など人間の日常的時間や場では起こっていない。筆者はしばしばクライアントの語りを、夢のように聞かせてもらっ

ているが、心理療法場面においては身近なことを語りながら、非日常と体験され、さらに、クライアントとセラピストがイメージを共有する境界の場であることと同質であるといえる。

そして、話が展開し、非日常の時に境界的場で人々が触れ合うのは、神話に語られる名だたる神ではなく、そこで生まれ粗末な姿をした神々や、山男や山女、あるいは、狼や狐や鹿、木々や茸といった動植物など自然界、あるいはそれを越えた存在である。それらと出会って、夢とも現ともわからぬ不思議な出来事が起こったとされる。その内容は一貫して、弱いもの小さいものに焦点が当てられ、人間の及び知らぬ大いなる力が働き、物事が生起し、死が常に在るものとして見据えられ、生と同等に扱われ、生死の境界上の物語となっている。

また、柳田が若き文学青年であった佐々木喜善から遠野の口承物語を聞き、『遠野物語』として執筆していたころ、人々は天皇信仰を強いられ、日本は大日本帝国として成長の一途をたどり、柳田はその国の官僚としての日々を送っていた。そんな生活の中で柳田の心の内に権力側に在る自己と、弱きもの小さきものへの心の痛みに共感する内なる原始人や未開人がうごめき強い葛藤が起こり、柳田の存在そのものが境界的であったといえる。その時、神々と共にあり、生も死も自然のこととして受け入れる豊かな自然、それを越える世界に住まう人々の物語は柳田の心を深く癒したに違いない。

柳田の時代から一世紀の時を経た今日、IT化の波に飲み込まれるように、若者は親子や友人など親密な関係を切断し、不安を感じながら回避している。あるいは、命は死のイメージを通して、豊かな生が育まれるにもかかわらず、若者たちの前にクローンに代表されるような、永遠に続く生命体がのっぺりと横たわっている。つまり、人々は適切な距離を保った豊かな境界を失い、それが多くの摩擦や障害、そして病理を生み出している。

その状況下で、心理療法を仕事とするわたしたちは、その力量が厳しく問われている。その時、『遠野物語』として表現された、豊かな境界イメージをわたしたちが内在化することで、境界を潤す新鮮な空気や肥沃な土地、深い山河となって、若者たちの切り裂かれた傷口を癒すのではないだろうか。

文 献

- 赤坂憲雄 1994 遠野物語考 宝島社
後藤総一郎監修 柳田国男研究会編著 1988 柳田国男伝 柳田国男伝年譜・書誌・索引 三一書房
岩田慶治 1993 アニミズム時代 宝蔵館
岩本由輝 1983 もう一つの遠野物語 刀水書房
ユング, C.G. 1954/林道義訳 1982 元型論・無意識の構造 紀伊国屋書店
河合隼雄 1991 イメージの心理学 青土社
河合隼雄 2002 物語を生きる 今は昔、昔は今 小学館
河合俊雄 2008 遠野物語から見た意識のあり方について 日本ユング心理学会セミナーでの発言からキャンパスプラザ京都 2008.11.16
ハイネ, H. 1853/小沢俊夫訳 1980 流刑の神々・精霊物語 岩波書店
中村哲 1974 新版柳田国男の思想 法政大学出版局
櫻井信也 2008 拒否不安尺度の信頼性、妥当性の検討と拒否不安の年代的变化 学生相談研究第29巻第2号 141-152
鶴見和子 1977 定住と漂泊と 筑摩書房
友久茂子 2006 イメージの重要性についての一考察——自ら命を絶ったA君との面接過程を通して——甲南大学学生相談室紀要第14号 23-32
柳田国男 1989 遠野物語 柳田国男全集4 9-72 筑摩書房
柳田国男 1974 故郷七十年 朝日新聞出版

ABSTRACT

A Study of Images for Psychotherapy through the “Toono Monogatari”

TOMOHISA, Shigeko

Konan University

This paper aims to show how images are essential to psychotherapy, by looking at the stories of the “Toono Monogatari”.

The “Toono Monogatari” is a book of 119 short folktales written by Yanagida Kunio, who was a folklorist. The characters in this book were not heroes or heroines, and were only described as “a man” or “a woman”. They are just ordinary people who lack power or authority. However, the interesting point about these tales is that they are a rich source of supernatural images of things which exist in the border zone between people and nature. Examples of these things are gods, mountain men or women, and animals with supernatural powers. An awareness of the existence of this border zone can help to create a bond between ourselves, other people, nature and the supernatural.

These days, the young people who come to the student counseling room tend to feel separated from nature, their inner world and even their fellow humans. Therefore, such people are often troubled in mind or spirit. Accordingly, in psychotherapy it is essential that therapists are aware of these boundary images, so that they can create a bond between these young people and the world around them.

Key Words : psychotherapy, images, Toono Monogatari
